

忘れ語り、いま語り

岡本太郎と縄文文化

これもパソコンのなかに残っていた、講演メモである。いつ、どこで行なわれた講演かは、不明である。

☆

(1)、縄文文化の発見とは何か

- ・発見とは何か
モノやコトにたいして、あらたな知の文脈に根ざした意味の附与をおこなうこと
- ・第一の発見／菅江真澄その他
1623年『永祿日記』（津軽）～1793『会津石譜』（会津）
菅江真澄の発見／「縄形、布形の古き瓦」「網代らしき紋様」という指摘、亀ヶ岡式と円筒土器とを区別してスケッチ、「いにしへの蝦夷」が作ったものかという推測、
- ・第二の発見／アメリカの考古学者E・S・モース
1879年『大森介壙古物（かいきよ・こぶつ）篇』
大森貝塚の調査・研究、詳細な土器の記述、「縄紋」紋様をもつ土器、「縄紋土器」という名づけの先駆け、……縄文考古学の幕開け
→東京帝国大学の人類学教室が継承、坪井正五郎～山内清男、
縄文土器の編年研究、土器の形式の研究＝縄文学
* *
- ・第三の発見／岡本太郎
1951年11月、東京国立博物館「日本古代文化展」の開催、縄文土器との出会い、
「四次元との対話——縄文土器論」（『みづゑ』1952、2）
モノとしての実証研究や分類にとられず、「縄文土器そのもの」との対話へ
縄文土器のもうひとつの顔、
造形的ないし美的な表情や側面、世界観の結晶として
反弥生的な美学の発見／凄み、
強烈な表情、戦慄、激しい流動性、
シンメトリーの拒絶、破調、ダイナミズム、
躍動・混沌・無限の回帰と逃走
……狩猟文化の影、殺した動物への鎮魂、豊穡祈願の呪術、
東北の鹿踊り、アイヌの熊送り
→縄文土器は、たんなるモノではなく、
そこには縄文人の心や精神が宿っている
それは形や紋様などのデザインの読解によって、明らかにすることが可能だ
縄文の美学は、弥生以降の美学の底にも、根強く生き延びているはずだ……

※小林達雄『縄文の思考』
縄文土器のデザインは、道具としての機能性を無視した、
縄文人の世界観を表現することをめざすものだった、
弥生土器は、機能性にもとづく、まるで異質なデザインの意識をそなえる
岡本太郎の問題提起をきちんと引き受けている考古学者のひとりか

(2)、マルセル・モース／民族学／博物館

- ・なぜ、上野の東京国立博物館、その収蔵庫だったのか
パリのミュゼ・ド・ロンム（人類学博物館）から、上野の国立博物館へ
→民族学を光源として、方法として、縄文は発見された
- ・パリ大学、マルセル・モースのもとで、民族学を本格的に学んだ
モースの時代／フランス帝国と植民地の時代、生まれたばかりの牧歌的な民族学
植民地博覧会から人類学博物館へ、
膨大な民族文化のコレクションのかたわらで
生活・生業から断絶した、呪術・宗教・儀礼など精神文化に片寄せた収集＝略奪
* *
- ・岡本太郎と博物館をめぐる風景、その第一章——
一九三〇年代のパリ、原風景として、万国博覧会・民族学・博物館がからみ合う姿
「ちょうどパリの万国博の跡地に、一九三七年、ミュゼ・ド・ロンム（民族学博物館）が開設された。前からトロカデロの古めかしい、暗い建物の中に展示物があったことは知っていたが、その新しい研究博物館を見て私はあっと思った。世界中のあらゆる土地からの資料がギラギラと輝いてひしめきあっている。アジア、アフリカ、南太平洋、北極圏……私は社会学と一緒に勉強していた友と語りあった。何と云っても、抽象論で人間存在を研究するのはまるで違った、なまなましい現実の彩りがここにはある。時空を超えた人間本来のあり方、そこからわき出てくる、むっとするほど強烈な生活感。ダイレクトにこちらにぶつかってくる。こんな具体的な資料を土台に、われわれ抽象的論理よりも、それを超えた人間学を学ぶべきではないか」（「自伝抄」）
一九三七年、パリ万国博覧会の跡地、ミュゼ・ド・ロンム（民族学博物館）
世界中の植民地を中心とした民族や地域から収集されたコレクション
→いまは、ケブランリー美術館に
コレクションのあまりの膨大さと壮麗さ、植民地主義の総集編
太郎／西欧美学の専制的なありようとの訣別、それにたいする挑戦といったテーマ
抽象芸術運動、シュルレアリスム運動に、どこか違和感
活路を、民族学という新興の学問、ミュゼ・ド・ロンムに求めた
「その後、私はソルボンヌ大学で社会学、民族学をやりはじめ、研究のため、数年間、ミュゼ・ド・ロンム（人間博物館）に通った。そこに集められている膨大なコレクション、それらの吐きかける原始の息吹、そしてまた東洋系文化の驚異的美にうたれ、魂の底からゆり動かされ、呆然としてしまった。」
「それらの美にいいようもない不思議な感動をおしつけられる。神秘的な厚みに没入し、溶け入るような熱い感情にひたった」

(2)、大阪万博／太陽の塔／民族学博物館

- ・縄文の発見から、東北と沖縄の発見へ
民族学的な「日本」、多様性を抱いた「いくつもの日本」へ
泉精一との対談『日本列島文化論』
近代の国家意識を自明の前提とした日本文化論へのアンチテーゼ
「日本」という言葉は使いたくない、「この場所」としての日本にすぎない、「日本列島」ですらない、「日本」はたんなる符号だ、A列島で構わない
- ・大阪万博／太陽の塔／民族学博物館
パリ万博からミュゼ・ド・ロンムへ
* *
- ・岡本太郎と博物館をめぐる風景、その第二章——
一九五一年の暮れ、東京・上野の国立博物館、縄文土器や土偶との劇的な遭遇翌年、「縄文土器論」を発表、センセーショナルな反響を呼び起こす
それまで、縄文土器はたんなるモノにすぎなかった
そこに、太郎が命を吹き込み、縄文人の精神世界を甦らせた
- ・岡本太郎と博物館をめぐる風景、その第三章——
一九七〇年、大阪万国博覧会
太郎は「日本館」のテーマ・プロデューサー
統一テーマは「進歩と調和」、
「進歩を競い、未来をみざすつくりもの、見世物ばかりで何か全体が浮き上ってしまいそうな会場の気配に対して、ぐんと重い、人間文化の深みをつきつけ」るために、途方もないプロジェクトを企てる
『美の呪力』の一節、
「私は今度、万国博のテーマ展示のために、世界中から仮面・神像・生活用具など、貴重な文化資料を集めた。東大、京大をはじめ、わが国の第一線の文化人類学者数十人に協力を依頼し、専門地域別に収集班を組織して、生きた生活の表現を探してもらった。テーマプロデューサーを引き受けたときに私は思ったのだ。博覧会といえば、場内はすべて新しい技術、アイデア、珍しい趣向を競いあうだろう。全部がそのためのつくりもの、見世物である。ましてテーマは「進歩と調和」だ。未来のほうにばかり眼が向かってしまって、虚飾に浮き上った祭典になってはつまらない。それに対して、テーマ館こそは何か人の心の奥底に、意識・無意識に、ぐんとぶつかってくる、人間生命の渾沌の重みをすえたい。つくりものでない、生活の根っこから自然にわきあがり、形づけられたモノ。それを、民衆生活のもっともひらいた感動である仮面・神像にしばったのだ」

はじめての大規模な民族資料の収集の試み、
世界中のさまざまな地域や民族から、貴重な仮面・神像・生活用具
総数二六〇〇点以上のすばらしい民族資料
テーマ館の「地下・根源の世界」に展示、仮面や神像がその中心に配された「人間生命の渾沌の重み」を伝えるために……
「神々の森」、太陽の塔の胎内にあった
人間は太古より逆に徐々に退化している、ちっとも進歩などしていない、万博ではすべてが近代的な機械に満ちた悪しき近代主義に覆われるだろうアンチテーゼとして、もっとも始源の人間の表情、太陽の塔を創った
*
それから、四十年近い歳月が流れて、太陽の塔だけが残る
民族学博物館が万博の跡地にできた
太郎が収集した仮面や神像など
むきだしの展示スタイルも踏襲されている

(3)、岡本太郎とパリ、ケ・ブランリー美術館

- ・ミュゼ・ド・ロンムから、ケ・ブランリー美術館へ
太郎がトロカデロのミュゼ・ド・ロンム（人類学博物館）で見た民族コレクション
太郎の思想や芸術のうえに濃密な影を落とすつづけた
セーヌ川をはさんだ対岸にあるケ・ブランリー美術館
原始美術のコレクションを集めた美術館
仮面や呪具、装飾品などが大半を占め、
生活や生業にかかわる道具類はほとんど見られない。
展示スペースの全体が、
オセアニア・アジア・アフリカ・アメリカの四ブロックに分割されている。
オセアニアがアジアから切り離され、ひとつの地域ブロックを形成している。
パプア・ニューギニアやメラネシアの島々の仮面や神像の、なんともグロテスクな群れ。
太郎がマルセル・モースのもとで、民族学の専攻領域としたのがオセアニアだった
* *
- ・オセアニアの民族コレクションから、
「縄文の発見」へ
その後の日本紀行、東北や沖縄の生々しい文化との出会い、
大阪万博の太陽の塔の地下にならべられたモノに、
また民族学博物館のコレクションへと
- ・太郎の絵画や彫刻に頻出する人・モノ・動物などの意匠の原典もここにある、
身をやつした民族学者として戦後を生き抜いた、
その作品は幾重にも「民族的」、いや「民族学的」なのである。
- ・日本再発見の旅へ、縄文から東北・沖縄へ。
奈良や京都を中心とした、手垢まみれの日本文化論にたいする、痛烈な懐疑と批判。
縄文／弥生の、二元論的な対比のもとに。
縄文——反農耕的＝狩猟文化、荒々しい力強さ、シンメトリーの拒絶、動物的、空間的
弥生——稲作農耕に根ざす文化、静謐さ、調和とシンメトリーを尊ぶ、植物的、形式的
太郎はどこまでも動物的な、縄文文化を、東北を、沖縄を恋い焦がれ、求めた。
日本列島の文化的な多様性に目覚める。
「ひとつの日本」から「いくつもの日本」へ。